



“運命”の名を持つファド 人間の奥底の情念を歌う

月田秀子さん（藤沢）

19世紀初めからポルトガルの港町リスボンで歌い継がれてきた民謡ファド。悲しみ、思い出、恋の喜び、憤りなど、心に湧き上がる感情を歌い上げます。月田さんは日本で数少ないファド歌手として活動しています。



月田 秀子 つきだひでこ

東京都町生まれ。ファド歌手。立命館大学二部文学部中退。関西芸術アカデミー俳優養成所を経て、未知座小劇場入団。シャンソンを、菅美紗緒、出口美保に師事。80年「シャンソニエ・ジルベール・ペコー」でデビュー。87年ファドの女王、アマリア・ロドリゲスの歌声に衝撃を受け、ポルトガル国立リスボン大学に語学留学。91年ポルトガル・リスボン市立アマリア・マトス劇場にて、アマリア・ロドリゲスのギタリストたちと公演し、アマリア自身に「アマリアを継承するファデスタ」として認められる。以後、日本のみならず、ポルトガルやマカオなど世界各地でライブを行う。11月28日（土）に藤沢リッパールでコンサートを開催する。藤沢在住。

一枚のレコードに心を揺さぶられ 単身ファドを求めてポルトガルへ

ポルトガルの民謡ファドとは。

「日本ではまだあまり馴染みのない音楽ですが、イタリヤのカンツォーネやフランスのシャンソン、ブラジルにはサンバがあるように、ポルトガルにはファドがあるとさえおわかりいただけませんか。ファドは19世紀初め頃からポルトガルの港町リスボンで歌い始められたもので、哀

愁を帯びた曲調に、慈しみや失われたものへの憂いなど、人の胸の内側に湧き上がる感情を歌い上げる民謡なんです

——ファドとの出会いは？

「私、以前は芝居をやっていたんです。でも多くの人と一緒に舞台上でものを作るといいうのがちよつと苦手で、30歳を過ぎた頃からシャンソン

をやるようになりました。シャンソンは歌う一人芝居とも言われるでしょ、自分には合っているような気がしたんです。そんなとき、君の声に合っているよと知人が一枚のレコードを聴かせてくれたんです。それが

ファドの女王と称されるアマリア・ロドリゲスの歌声でした。シャンソンとはまったく違う世界で、もつと人間臭くて力強い。アマリア・ロドリゲスの声自体、きれいとか上手いとかを超越した、人間の持つ性や情念が声となつてほとばしっているような、言葉では表現できない輝きを放っていました。ポルトガル語なんてまったくわからないのに、その声に一瞬で心揺さぶられてしまった……。そして自分の進むべき道はこれだと感じたんです。レコードを初めて聴いた2年後に単身ポルトガルへ行こうと決め、本場のファドに触れるべく現地へ赴きました

——あくまでも本場のファドを。

「一意込んでポルトガルへ渡ったのですが、レコードで聴いたような心

に響く歌声はどこを探しても見つからなくて……。町ではいろいろな人がフアドを歌っているので聴きに行くんですけど、どれも私の求めている歌声ではなかったんです。ポルトガルまで来たのに追い求めるフアドに出会えず、落ち込んでいたときに知人に市場へ行ってみたらといわれたんです。なぜ市場なんだろうと思いながら足を運んでみると、物売りの声や行き交う人の声がフアドの歌声に重なって聴こえてきたんです。そのとき私の求めていたのは民衆のなかに息づく歌声だったんだと初めて気がつきました」

——民衆のなかの歌声。

「もともとフアドは酒場で歌われていた音楽で、そこには舞台などはなく、歌い手も観客と同じ高さでマイクを使わずに生の声だけで歌い上げていました。歌詞に共感した人のため息や汗や涙を感じられる距離感で歌う、それがフアドでした。いまは本国でもそのスタイルが段々崩れてきていて、歌手と聴衆が舞台と観客

席に別れてしまい、歌手が聴かせる歌になってしまった。それは何か違うように感じました。私も大きなホールで行うコンサートでは難しいのですが、小さな会場でライブを聞くときにはなるべく舞台を低くして、可能な限りマイクを使わず、生の声

だけで歌うように心がけ、フアドの原点である「民衆のなかの歌声」を意識して歌っています。自分の内面からメラメラと燃え上がってくる思いや、叫び、静かな祈りを思いのままに歌う、それがフアドの魅力だと思います」

難病を抱えたいまも歌い続ける…… それが私の「生きていく証」だから

——憧れの人は出会えた？

「ポルトガルに渡って4カ月を過ぎた頃にアマリア・ロドリゲスに直接会うことができました。彼女はポルトガルの文化大使のような存在でヨーロッパだけでなく日本にも公演に招かれることが多く、本国でのライブはなかなか聞かれていなかったんです。久々にライブがあると聞き、彼女のギタリストをしていた友人に頼んで会場にもぐり込ませてもらいました。実はそのライブの少し前に私は現地のテレビでフアドを歌わせてもらえる機会があって、ポルト

ガル人の魂を歌える日本人の歌手として紹介されていたんです。そうしたらステージで突然アマリアが「テレビで日本人女性が私のフアドを歌ったんだけど」と話し出したんです。もう驚いてしまって、会場に私が来ていると知ったアマリアが私を舞台上に引き上げてくれ、そこで憧れのひととの初対面を果たしました。そのときに「ビデオのために一曲歌う」といって「炎のバラ」という曲を歌ってくれました。それはもう夢のような瞬間。その後彼女の自宅に招いていただき、以後、公演で来日すると

きには必ずお会いしていました」

——劇的な出会いですね。

「91年に私がリスボンでコンサートをしたときの打ち上げにもアマリアが来てくれ、彼女のレコードにサインしてくださいましたが、そこに『次なるアマリアへ』と書かれています。このレコードは私の宝物です。99年にアマリアは他界しましたが、

彼女が『あなたが私の曲を歌い続けることで私はずっと生き続けるのよ』と言ってくれたことがあります。そんな彼女の期待に応えられるようにならなくてはと思っています」

——日本では数少ないフアド歌手。

「最近では現地でフアドを学んで歌う方も出てきましたけれど、まだフアド歌手はそれほど多くいません。フアドは暗いものが多いと思われていますが、恋が成

就した喜びや町の

白慢を歌った明るい

内容の曲もあります。それでも自身は哀愁を帯び



た楽曲を好んで歌っています。町の風景を歌うとしても、私はその場に生活しているわけではないので、そこに感情を入れて歌うことができないんです。それよりは人間が抱えている孤独や老いへの憂いなど国境を越えて共感できるテーマのほうが私には歌いやすいんです」

——作家の五木寛之氏のコンサートに参加されたこともあるとか。

「五木先生もフアドがお好きで、小説のなかにもフアドをテーマにお書きになった作品があります。私は先生のラジオ番組に出演したのをきっかけにコンサートにゲストとして招いていただいたことがあります。先生には『月田が歌えば何でもフアドになるんだからジャンルにこだわることはない』とうれしい言葉をいただいています」

——数年前からは難病を抱えて……

「誰しも病氣や悩みを抱えているもので、私の抱える痛みには線維筋痛症という病名が付いているだけ。この病は神経の誤作動が痛みを引き起

こすというもので、何をしても全身が痛くて、血管のなかにガラスの破片が流れているように感じるんです。病名が判るまでの間はとても辛くて、どんなに検査をしても数値は正常を示しているので周りには理解されにくい病氣なんです。病名が判りお薬を処方されてだいぶらくにはなりましたが、いまでは生きていくからこそ痛みがあるんだと思えるようになりました。でもフアドを歌っていると痛みを忘れてしまうの。

打ち込めるものがあることが救いで、私は本当にラッキーでした」

——11月には藤沢でコンサートも。

「11月28日(土)14時半から藤沢リラホールでコンサートをを行います。湘南地区では5月の鎌倉、7月の逗子に続き今年3回目の公演になります。今回はアマリア・ロドリゲスの代表

曲『暗いほしけ』や『懐かしのリス

ボン』などのほか、皆さんが初めて

聴かれる曲も予定しています。ぜひこの機会にフアドの魅力に触れ、心の旅を楽しんでください」